

「南部的なるもの」との邂逅——シャーウッド・アンダソンの
「南部での出会い」を読む

藤 田 秀 樹

富山大学人文学部紀要第55号抜刷

2011年8月

「南部的なるもの」との邂逅——シャーウッド・アンダソンの 「南部での出会い」を読む

藤 田 秀 樹

1

重度の流行性感冒の療養のため、シャーウッド・アンダソンは1920年の2月初旬から約4ヶ月間、シカゴを離れてアラバマ州のモビールやフェアホープに滞在した。モビールでの最初の夜を迎えたとき、彼は北部とは「固めたこぶし(a hard fist)」のようなものであり、一方南部は「開いて力を抜いた手(an open, relaxed hand)」のようなものだと感じた(Rideout 1)。北部の人間である彼にとって、南部は全く異質な肌理を持つ世界に見えたのである。そして南部の中でも、同年の5月末まで数日間を過ごしたルイジアナ州ニューオーリンズは、特に彼を強く魅了する場所であったようだ。実際、その後彼は二度（1922年、及び1924年から1925年にかけて）この街に長期滞在することになる。そして1920年代と1930年代において、彼はガートルード・スタイン、アースキン・コールドウェル、ウィリアム・フォークナー、ジョン・ドス・パソスらとともに著述を通してこの街の知的活動に参加し、その結果ニューオーリンズは急速に南部の文化的都になっていったのである(Bryan 79)。

アンダソンの「南部での出会い」(“A Meeting South”)は、このニューオーリンズを舞台として1925年に発表された短編小説である。標題の通り、この物語ではいくつかの出会いが起こる。具体的には、この物語の語り手であり、中西部出身で「単なる客」(225)のような立場でニューオーリンズに滞在していた「私」と、アラバマ出身のデヴィッドという名の詩人との出会い(「私」は繰り返し彼を「南部人」とか「南部の詩人」と形容することで、彼の南部人という属性を強調する)、そしてこの二人と、「私」と同様に中西部出身だが30年に渡ってニューオーリンズで生活してきたために「完全に南部人になってしまった(had become completely Southern)」(239)、通称「サリーおばさん(Aunt Sally)」と呼ばれる街の伝説的女傑とでも言うべき老女との出会いである。

この物語の一人称の語りから伝わってくるのは、デヴィッド、サリーおばさん、そして舞台となる街ニューオーリンズに「私」が強く魅了されているということである。そして、物語の終わり頃に興味深い記述が見られる。デヴィッドとともにサリーおばさんの家を訪れた「私」は、酔って中庭で眠り込んでしまったデヴィッドを残し、独り彼女の家を辞して夜の通りを歩き出す。二人と別れた「私」の頭に浮かぶのは、「私は結局北部人なのだ(I was, after all, a Northern man.)」(239)という思いである。このように自らを「北部人」として、いわばデヴィッドやサ

リーおばさんとは異なる存在として定位したあと、さらに「私」の頭にある想念が浮かぶ。それはデヴィッドやサリーおばさんのような「貴族的な人々 (aristocrats)」(239)に関わるものである。この「アリストクラッツ」という言い方も興味深い。マーガレット・ミッチェルの『風とともに去りぬ』(*Gone with the Wind*)で活写されたように、擬似貴族的な階級の存在は南部をめぐる表象に繰り返し現れるロマン的、神話的イメージのひとつであり、この「アリストクラッツ」という語にもそのような南部の彩りが添えられているように思われる。もっとも、デヴィッドの実家が零落寸前の農園であることや、サリーおばさんがかつていわゆる「悪所」の経営者であったことを考えるなら、この語は社会階層的なカテゴリーとしてではなく、ある種の(それも南部に特徴的な)生き方、精神のあり方、心性といったものを表すものとして用いられているのであろう⁴⁾。そして「私」はその「アリストクラッツ」について、「たぶん私は、こういう人たちのことを少しはわかっている(Maybe I do understand them a little.)」(239)という思いを抱く。ここには、自分は北部の人間だが、南部のアリストクラッツというものを理解することができるのだ、というささやかな喜びと自負の念が窺える。

こうして見るとこの短編小説は、北部人である「私」にとっての南部との邂逅の物語、言い換えれば、二人の人物とニューオーリンズという街を通して「南部的なもの」を再確認していく物語なのではあるまいか。そしてのちに詳述することになるが、そこで浮かび上がる「南部的なもの」は、アンダソンが北部と対比させて南部を形容するのに用いた「開いて力を抜いた手」という比喻と少なからず響きあうもののように思える。例えばそれは、声高でアグレッシブな自己主張の対極にあるような恬淡とした物腰や生き方であったり、雑多なものを受け入れ清濁を併せ呑むような柔軟で開放的な精神的風土であったりする。小説の一人称の語り手と作者自身を安易に重ね合わせることには一定の留保が必要であろうが、「私」が中西部のオハイオ州出身でニューオーリンズには「単なる客」として滞在していること、またデヴィッドの特徴を列挙したのち、「これらのこと全ては、私が今書こうとしている物語を直ちに私に語り始めた(all these things began at once to tell me the story I have now set myself to write.)」(221)と述べることで自分が作家であることをほのめかしていることなどを考えると、この作品を、「私」の語りを通してのアンダソンの南部へのオマージュと見ることもできるのではなかろうか。以上のことを念頭に置きつつ、短編小説「南部での出会い」を読み解いていくことにする。

2

物語は以下のような一節とともに語り起こされる。

He told me the story of his ill fortune—a crack-up in an airplane—with a *very* gentlemanly little smile on his *very* sensitive, *rather* thin, lips. Such things happened. He might well have been

speaking of another. *I liked his tone and I liked him.* (221; emphasis added)

この中の「彼」とは「南部の詩人」デヴィッドのことだが、この短いパラグラフから窺えるのは、語り手の「私」がデヴィッドに強く引き付けられていることである。最初の文における彼の容姿の記述だけで、“very”が二度、さらには“rather”というように、強意副詞が三度も用いられており、また最後の文でも素朴で単刀直入な「私は気に入った」を二度繰り返すことで、「私」が彼に対して抱いたであろう虚心に飾り気のない好感が伝わってくる。このあとも一気呵成とばかりに「私」はデヴィッドについて語り続け、ややあってようやく、「私は少々唐突過ぎるくらいに自分の物語を始めてしまっている(I am plunging a bit too abruptly into my story.)」(222)と弁解するように述べるありさまである。興に乗ってしゃべりすぎた自分に気づき、あわてて自己抑制をかけたかのような印象を与える。

さらにこの冒頭のパラグラフで読者の目を引くのは、その文体である。特に最後の文に顕著に現れているが、凝った文飾や修辞とは無縁の、きわめて素朴で平明な語りのスタイルが展開される。それはこの作品全体の主調でもある。「語りのスタイル」と書いたが、まさにそれは文章体というより聞き手に語りかけるようなオーラル・ナラティブのスタイルと言える。しかもそれは重々しい壮言風のものでもなければ、整然とした説明的なものでもない。例えば、「私」が自分自身とサリーおばさんについて次のように語る箇所がある。「我々はこちら[ニューオーリンズ]では単なる客のようなものにすぎない。しかしおそらくどちらも、何か妙な具合にこの街とじっくりいくのである(We are but guests down here, but perhaps we both *in some queer way* belong to this city.)。 そういうたぐいのことが起こっているのだ(*Something of the sort* is in the wind.)。 どうしてそういうことになったのかは、ちょっとよくわからないが(*I don't quite know how it has happened.*)」(225; emphasis added)。さらに、やはりサリーおばさんについて次のようなくだりがある。「何かよくわからない、名状しがたい具合にはあるが、彼女が私と同じ州の出身だと思とうれしくなるのだ(*In some obscure subtle way* it would flatter me to think she came from my state.)」(230; emphasis added)。ともすれば曖昧さや歯切れの悪さといった印象を与えかねない一方で、「よくはわからないが何となく」というこれらの語り口は、明言や断定といった口振りにはない、何かある種の含羞すら感じさせるような独特の柔らかさ——アーヴィング・ハウはこの作品のトーンを「かすかに当惑を含んだ柔らかさ(a slightly bewildered tenderness)」(147)と表現する——を醸し出すものとなっている。同時にそれらは、明晰性をあえて排除することにより、多様な受け止め方や感じ取り方のより大きな余地を許容するものともいえる。このような文体自体が「開いて力を抜いた手」と響きあうもの、と見るのは穿ち過ぎだろうか。

さらに冒頭のパラグラフの、「そういうことはあるものだ、と彼はまるで他人事について語

っているみたいだった」というくだりにも注目したい。自分が乗っていた飛行機の破砕という激烈な災難についての話であるにもかかわらず、デヴィッドの語り口は淡然としたものであり、それを「私」は「気に入った」のである。このような力みのない恬淡たる佇まいはデヴィッドの人物造型の中心的な要素だが、それは彼だけのものではない。全てを受容する母親のような悠揚たる雰囲気を含めたサリーおばさんにもそれは当てはまるし、さらにはこの物語自体が意志的というほどに劇的なものを排除し、淡々とした調子で進行していく。そもそも「南部での出会い」というタイトルにもかかわらず、出会いに至るプロセスは実にあっさりとしている。デヴィッドは「私」の友人であるフレッドに会うためにニューオリンズにやって来たのだが、そのフレッドはすでにこの街から去っていた、というのがデヴィッドと「私」の出会いのきっかけである。いわば両者の出会いは長く切望されたといったものではなく、単なる思惑違いから生じたものなのである。さらに彼らのサリーおばさん宅訪問も、「彼をサリーおばさんのところへ連れて行って会わせてやろう (I shall take him to see Aunt Sally)」(221)という、「私」の一見唐突とも見える思いつきによりあっさりと実現してしまう。

かようにこの物語は、その冒頭から語り口及び人物造型が相似形を成しつつ独特の模様を形成するようなものとなっている。

3

ここで、舞台となるニューオリンズが「私」の目にどのように映っているかを見ていくことにする。この南部の街についての語りは、「あなたはニューオリンズを知っているか? (Do you know New Orleans?)」(223)という問いかけから始まる。続いて我々が目にするのは、次のような否定的な響きを持つ記述である。「ニューオリンズに住む、しかも他の住民よりも進歩主義的な人々の中には、今やこの街を軽蔑する者もいる (Some of its own, more progressive, people scorn it now.)。シカゴやピッツバーグとは似ていないという理由で、恥ずかしいと感じるようなところがニューオリンズにはある (In New Orleans there is a sense of shame because the city is not more like Chicago or Pittsburgh.)」(224)。二つ目の文でニューオリンズと対比されるシカゴとピッツバーグは、商工業の目覚ましい発展により現代的な大都市の威容を誇る代表的な街として言及されているのだろう。それに対して「私」が「古い街(the old city)」(224)と呼ぶニューオリンズは、進歩、発展、変化、先端性、功利性といったものとは縁遠い、またはそれらとは別の原理で動いている街であり、それゆえに進歩や変化や新しいものを支持する“progressive”な人々にとっては軽蔑すべきものということなのであろう。また同時に、この“progressive”は「革新主義的」という語義を担っているのかもしれない。「革新主義(Progressivism)」とは、20世紀初めから第一次世界大戦の頃までのアメリカで台頭した社会改革の気運を指す語である。“progressive”という語をそのように捉えた上で問題の文を読み直すとき、つまり社会や政治

の不正・腐敗に対して強い問題意識を持つような人々にとってニューオーリンズは厭わしい街だ、と読むとすれば、そのような態度を理解するヒントとも思えるものが、物語の少し前の部分に置かれている。実はデヴィッドはアルコール依存症の状態にあり、会ってすぐに「私」は彼が酒を飲みたがっているということに気づく。そして「私」によれば、「たとえ禁酒法の時代であっても、ラテン系の人々と暑い夜の愛すべき街ニューオーリンズでは、そういったものは都合をつけることができるのだ(in New Orleans—dear city of Latins and hot nights—even in Prohibition times such things can be managed.)」(222)。もちろん禁酒法下とはいえ、他の都市でももぐり酒場などで酒にありつくことはできたのだろうが、ニューオーリンズでは特にその許容度が高かったということなのであろう。いわば厳格に遵法的ではない、ことさらに公序良俗を言い立てない闊達さや緩さを持った街なのである。「ラテン系の人々の街」という言い回しは、歴史的にこの民族集団の濃度が高いことのみならず、この街がアングロサクソンのな心性——ある批評家によれば、秩序志向、清浄志向(Novak 122)——とは異質な精神的、社会的風土を持つものであることを、「暑い夜の街」も労働と禁欲の時間としての昼ではなく慰安と官能の夜と親和するような——しかも「暑い」ゆえに開放的で情熱的なイメージが加わる——街だということを示しているのではないか。

このようにニューオーリンズに対して冷ややかなまなざしがあることに言及しつつも、その直後に「私」はこう語る。「しかしそれは、ダヴィッドと私には似合いの街だった(It, however, suited David and me.)」(224)。ニューオーリンズとデヴィッドと「私」が感性的に親和し合うものであることが簡潔に述べられている。「私」はデヴィッドとともにこの街をそぞろ歩きするのだが、そのときの様子を次のように活写する。

We walked slowly, on account of his bad leg, through many streets of the Old Town, Negro women laughing all around us in the dusk, shadows playing over old buildings, children with their shrill cries dodging in and out of old hallways. The old city was once almost altogether French, but now it is becoming more and more Italian. It however remains Latin. People live out of doors. Families were sitting down to dinner within full sight of the street—all doors and windows open. A man and his wife quarreled in Italian. In a patio back of an old building a Negress sang a French song. (224)

旧市街の通りを彩るのは、まわりじゅうで聞こえる黒人の女たちの笑い声であり、古い建物の上で戯れる影の群れであり、建物の古めかしい玄関をひよいひよいと出入りする子供たちの甲高い喚声である。猥雑な活気に満ちた市井の営みが伝わってくるような描写といえる。そしてその営みはとても開放的なものでもある。家々は「全てのドアや窓が開けっ放し」で、「家族

は通りから丸見えのところでは食事をしている」のであり、まさに「人々が屋外で生活している」ようなものなのだ。さらにそこは、イタリア語の口論やフランス語の歌が聞こえてくるという、多様なものが混在するハイブリッドな空間なのである。

かように「私」にとってニューオリンズとは、おおらかで受容的、開放的で、産業資本主義や物質主義が求めるものとは別様の価値を拠り所とし、雑多なものがたくましく共存することにより独特の生の鼓動を感じさせるような空間だといえよう。

4

さて、会ってすぐに「私」の中に「彼のこともっとよく知りたいという強い願望(a strong desire to know him better)」(221)を呼び起こしたデヴィッドとはいかなる人物なのか。ウィリアム・フォークナーがこの人物のモデルであることはしばしば指摘されるところだが(Rideout 20)、本論の主眼は「文壇交流」といったものにあるのではない。「私」がデヴィッドを介して魅了された「南部的なるもの」を掘り起こしていくことにする。

本論の二つ目のセクションで述べたように、デヴィッドについての記述で強意副詞が繰り返し使われることなどから「私」が彼に強く引き付けられていることが窺えるが、同時に彼の物腰や容姿に関する記述からは興味深い特徴が浮かび上がってくる。先に引用した冒頭のパラグラフの中に“a very gentlemanly *little* smile” (emphasis added)という表現があるが、さらに以下のくぐりを見てみよう。

When we went down the stairs from my apartment I noticed that he was a cripple. The *slight* limp, the look of pain that occasionally drifted across his face, the *little* laugh that was intended to be jolly, but did not quite achieve its purpose, all these things began at once to tell me the story I have now set myself to write. (221; emphasis added)

繰り返し用いられる“little”や“slight”といった語からは、自己顕示や自己主張、大仰な自己表出などはおおよそ無縁の抑制的な佇まいが浮かび上がる。上記の記述にあるように、跛行も彼の特徴のひとつだが、その原因となった第一次世界大戦中の出来事、つまり搭乗していた軍用機の墜落について語るときにも、その淡々とした気負いのなさは印象的である。そもそもデヴィッドは「私」が推断するところによれば、「都会で一晩を過ごす田舎者がショーでも見物しに行くような気分で(in the spirit in which a countryman, in a city for a night, might take in a show)」(227)イギリスで飛行士として入隊したのであり、自らの戦時中の災難についても、「少年が丘を走り下ったときにつまさきを何かにぶつけて痛めたことについて説明するような調子で(as a boy would explain when he has stubbed his toe running down a hill)」(227)語るのである。歴

史上未曾有の大戦争への参与も、飛行機の墜落という当時としてはきわめて限られた人間しか体験し得ないような椿事も、何か日常的な瑣事のごとくさりげなく語られてしまう。デヴィッドはこのような枯淡の雰囲気をも漂わせる人物なのである。

一方で彼は、跛行もそれを印象づけるもののひとつかもしれないが、壮健や活力といったものとは縁遠く、どこか衰微の影のようなものを宿した存在でもある。「私」によれば、「彼の体はとても小さく華奢なつくりであった (His body was very small and delicately built.)」(222)。さらに、「彼はやせた手を同じようにやせた頬に当て続けた (he kept putting a *thin* hand to an equally *thin* cheek)」(227; emphasis added) といった記述も、彼の衰微を窺わせるものである。その上、彼はアルコール依存症の状態にあり、「少し酔っていないと決して眠らないし、眠れないのであった (he never slept, could not sleep, except when he was a little drunk.)」(228)。衰微の影が差すのは彼の肉体だけではない。彼はイギリスから渡ってきて農園主として財を成した人物の曾孫なのだが、アラバマにある彼の実家は今やほとんど零落の状態にあった。父の代になると土地は数百エーカーしか残っておらず、しかも「その土地は多額の抵当に入っており、そのほとんどはもう何年も耕作されていないありさまだった (The land is heavily mortgaged and most of it has not been under cultivation for years)」(235)。イギリス系の富裕な農園主一族の末裔が今や零落状態にある。これは南北戦争以降の「古き南部 (the Old South)」の衰退、没落を縮図的に表すもののようにも思える。先述のようなデヴィッドの恬淡たる佇まいは、ひとつの秩序が終末を迎えつつあるさまを諦念とともに見つめてきた者のそれなのかもしれない。

一方でデヴィッドは、衰亡の色が濃い農園で秋の夜に黒人たちによって繰り広げられる祝祭のような狂躁について語る。まず彼は、屋外でないと眠ることができないという自らの性癖を口にする。これはニューオリンズの住民の「屋外で生活している」に等しいような暮らしぶりに相通じるものだが、同時に彼のホームレス的、流れ者的感性を表すものでもあろう。彼はウィスキーの瓶を持って農園内の黒人たちの小屋のそばにあるサトウキビ畑に入り込み、そこでしこたま飲んで地面の上に身を横たえる。黒人たちはサトウキビの液汁を搾り取り、それを煮詰めて糖蜜を作っている。そばにデヴィッドがいることに気づかないまま、彼らは作業をしながら歌い笑い、叫んだりする。このような光景は、黒人の女たちの笑い声や子供たちの喚声や黒人女が歌うフランス語の歌が響き渡るニューオリンズの街並みを想起させる。さらに、若い男女が干からびたサトウキビの山の上でセックスをすることもある。まさに素朴な生のエネルギーが横溢するオーギーのようなひと時である。かつての支配階級が疲弊する一方で、最下層に置かれた人々の営みが対抗文化のように密かにたくましく鼓動している。そしてデヴィッドは、窃視者のように身を潜めながら、この鼓動に聞き入るのである。かつて中心を成していたものに漂う疲弊と終末の気配と、それとは対照的な生の地下的な躍動の双方を見極め、そこから言葉を紡ぎだすことが「南部の詩人」の務めであるかのように。

5

ここからは、デヴィッドと出会った直後に、彼を引き合わせるべき人物として「私」の脳裏に啓示のごとく立ち現れた女性であるサリーおばさんについて見ていくことにする。彼女は65歳で、「太い腕となかなかの太鼓腹をした大柄な女性(a large woman with great arms and rather a paunch)」(228)である。伝説的な存在であり、「ニューオリンズのその界限一帯は彼女に関する逸話で溢れている(That whole neighborhood in New Orleans is alive with tales concerning her.)」(230)ののだが、決して公的な意味での名士ではなく、いわばニューオリンズの裏面史を彩るような人物である。

サリーおばさんが中西部からニューオリンズへとやって来たのは、この街がまだ「荒々しく(wild)」、「酒や賭博などの規制が緩い時代(the wide-open days)」(230)であった。フレンチ・クオーターに店を一軒開くことになるが、その際彼女はひとつの直感に従い、「内部をいくつもの小室に細かく分割するといったたぐいのことをしてその店を現代風にするのではなく、元の状態のままにしておき(Instead of making the place modern, cutting it up into small rooms, all that sort of thing, she left it just as it was)」(231)、壁や階段などの補修に金をかけた。この記述の直後に、「私」の次のような言葉が挿入される。

After all, we do seem attached to sin and there are so many people busy making sin unattractive. It is good to find someone who takes the other road. It would have been so very much to Aunt Sally's advantage to have made the place modern, that is to say, in the business she was in at that time. If a few old rooms, wide old stairways, old cooking ovens built into walls, if all these things did not facilitate the stealing in of couples on dark nights, they at least did something else. She had opened a gambling and drinking house, but one can have no doubt about the ladies stealing in. (231)

「つまるところ、我々は罪というものをとても好んでいるようなのだ」という文は、サリーおばさんの店が「罪の街(City of Sin)」という異名を持つニューオリンズにふさわしい背徳と享楽の空間であることをほのめかす。そして「罪をつまらないものにしてしまうことに精を出す人々はとてもたくさんいる」一方で、彼女は「その逆の道を辿る人」であり、それは店を「現代風」にしなかったことから窺える。もしいくつもの小室をこしらえるといった形で「現代風」にすれば、「闇夜にカップルがそっと入り込むこと」を売り物にするような店になり、「サリーおばさんにとっても大きな利をもたらすものになったはず」だが、彼女はあえてそのようなことはしなかった。営利や商売上の効率を重視し、店を諷有りのカップルが情事のために利用するような後ろ暗く人目を忍ぶ場所にしてしまえば、それは「罪をつまらないものにしてしまう」ことだと彼女は直感したのであろう。その結果できあがったのが「賭博場兼酒場」という

形態の店である。いわば雑多人々の遊興的な交流、交歓の空間といえよう。やがて店の二階にある大きな部屋の窓際のテーブルには、ミシシッピー川を根城とする賭博師や競馬狂の男たちがたむろするようになり、夕暮れ時には女たちもそっと入り込んだ。さらに、内部を小室に分けることはしなかったものの、夜には恋人たちの逢瀬の場にもなった。サリーおばさんはこの店をたくましく精力的に切り回し、ダニエル・デフォーの小説のヒロインである「モル・フランダースならサリーおばさんと一緒に暮らせたかもしれない(Moll Flanders might have lived with Aunt Sally)」(232)と「私」に思わせるようなしたたかな女傑になった。

ところで、この店についての記述で興味深いのは、そこに繁茂する植物の描写がちりばめられていることである。壁などに巻きついて伸びる植物が必要な陽光を得られなくなるように、誰かがサリーおばさんの店の中庭の片側に高い壁を築いたのだが、「それにもかかわらず、バナナの木はすくすくと成長した(The banana plants, however, did very well)」(235)のであり、「壁には美しいモンタナの薔薇が狂ったように猛烈に咲き誇り(On the wall the lovely Rose of Montana bloomed madly.)」(231-232)、「芳しいランタナはその壁の隅に鬱蒼と生い茂った(The fragrant Lantana grew in a dense mass at a corner of the wall.)」(232)。さらに中庭の中央に植えられたセンダンは、「春にはあたり一帯を芳香で一杯にした(filled the whole neighborhood with fragrance in the Spring)」(232)。まさに奔放で横溢する生命力や活力を体現するような植物群だが、さらに興味深いのは、これらの繁茂が店の興隆と共振するようなものとして記述されていることである。先に引用したサリーおばさんの八面六臂ぶりを伝える「モル・フランダースならサリーおばさんと一緒に暮らせたかもしれない」のあとに「彼女たちはどんなにすごい二人組みになったことだろう！」という文が続くが、その直後に来るのは次のような記述である。「センダンは元気旺盛になり始めている。ランタナは咲き誇っている。秋にはモンタナの薔薇だ(The Chinaberry tree beginning to be lusty. The Lantana blossoming—in the Fall the Rose of Montana.)」(232)。さらに別の箇所には以下のような一節がある。「二階のいくつかの部屋のテーブルにつく賭博師たち、身を潜めるカップルたち、階下の古めかしい中庭からは生い茂るものたちの芳香(Gamblers at the tables in some of the rooms upstairs, lurking couples, from the old patio below the fragrance of growing things.)」(233)。引用からもわかるように、主部と述部を備えたカンプリート・センテンスではない断片的な記述がモンタージュ的に組み合わせられており、それはモンタージュ的な映像のように、サリーおばさん及び彼女の店と植物群とのイメージ的連関を暗示する手法のように見える。つまり、たくましく繁茂、繚乱し芳香を放つこれらの植物群は、サリーおばさんの活力と彼女が切り回す「悪所」の蠱惑的な営みの隠喩なのではあるまいか。まさに背徳と享楽と官能の香りを漂わす「悪の華」というところであろうか。

もうひとつ、サリーおばさんの人物造型に関して興味深いのは、彼女の母性的イメージである。デヴィッドを彼女の元に連れて行ったとき、「私は彼を母親の元に連れて来たのだ(I have

brought him to a mother.)」(230)という自己満足的な思いが「私」の中にわきあがる。さらには、「彼女は母親のようなタイプの人物である(She is a motherly soul.)」(234)という記述、彼女がセンダンについて語るときの「もし娘のことを語ったならこうなるであろうという調子で(as she might have spoken of a daughter)」(235)という記述も彼女に母性的イメージを付与するものであろう。規範的で子を厳しく峻別するという側面を持つ父とは対照的に、情緒的で全てを受容するのが母だとすれば(松本 13-14)、営利や公序良俗といった価値や基準にとらわれない大らかな受容性を持つサリーおばさんは、まさに「母」の面影を備えた人物と言えるだろう。そしてこの「母」の元にいざなわれたデヴィッドは、彼女から供されたウィスキーを飲み、やがて彼女の家の中庭に横になって眠り込む。小さな体を丸めて眠り込むその姿は、無防備に全てを「母」に委ねた赤子のようにも見える。

6

文芸雑誌『ダブル・ディーラー (Double Dealer)』の1922年3月に発行された号に、アンダソンの「ニューオリンズ、『ダブル・ディーラー』、そしてアメリカにおけるモダン・ムーヴメント(New Orleans, the *Double Dealer*, and the Modern Movement in America)」と題するエッセイが掲載されている。ウォルター・B・ライドアウトによればそれは、「彼が愛するようになっていた街への歓呼の叫びであり、別れの言葉(a hail and farewell to the city he had come to love)」(10)なのだが、この中でアンダソンは、自分が生きている間にアメリカは「生と思考の画一化(standardization of life and thought)」(qtd. in Rideout 10)を受け入れてしまっている、と述べる。画一化に加えて、アメリカ的生活は「進歩」の単なる量的な目標に没頭しているが、その一方でニューオリンズの旧市街は、「量より質、蓄積することより生きることを重視する(think more of quality than of quantity and more of living than of accumulating)」(qtd. in Rideout 11)という精神風土を伝統的に持つ場所なのである。このようにアンダソンは、ニューオリンズを当時のアメリカを席卷する画一化と飽くことなき量的拡大及び蓄積の追求という風潮とは相容れない、そしてそれに抗う価値や心性を蔵するものと捉えている。

ここで、本論冒頭において提示したアンダソンが北部と南部を対比的に表現するのに用いた比喩に立ち戻りたい。「固めたこぶし」という表現から浮かび上がるのは、硬直、強張り、閉鎖、敵対、不寛容、さらに“hardfisted”という語と結びつく吝嗇、無慈悲、といったイメージ群であろう。そしてこれらのイメージを介して、「固めたこぶし」は先述のエッセイでアンダソンが記述したアメリカの状況に照応するもののように思える。つまりこの表現は、異質なものを多様なものを許容することなく、生と思考の自然で自由な躍動を抑え込み、それらを単一の鋳型にはめこもうとする画一化の硬直性、閉鎖性、不寛容さ、狭量さ、さらには止むことを知らない強迫的な量的拡大と蓄積が暗示する貪欲さと絶え間ない緊迫状態、といったものの隠喩な

のではあるまいか。

一方「開いて力を抜いた手」から連想されるのは、弛緩、和らぎ、融和、寛容、柔軟、開放、受容、さらには“open-handed”という語と結びつく物欲や我欲の希薄さ、といった属性であろう。そしてここまで見てきたように、これらはニューオリンズ、デヴィッド、サリーおばさんの特徴づけるものでもある。ニューオリンズの雑多なもの、多様なものが混在・混交するハイブリッド性と開放性、さらに禁欲的なモラルや中産階級的公序良俗に縛られることのない闊達さや鷹揚さ、デヴィッドの功名や栄達、我欲といったものとは無縁の恬淡たる佇まい、彼の農場で展開される黒人たちの生のエネルギーの直接的で自然な発露、サリーおばさんの店における生産と蓄積の経済合理性に背を向けた利他的、享樂的蕩尽、また彼女の全てを抱擁する母のような受容性。これらはまさに「開いて力を抜いた手」と見合うものと言えるだろう。いわばこの三者が三位一体を成しつつ、「南部的なるもの」の基調を奏でているのである。

さらにアンダソンは『ダブル・ディーラー』のエッセイにおいて、アメリカの状況とからめて文学表現の可能性にも言及している。それによれば、大衆雑誌の技巧的には熟れているが中身の無い物語群に反映される生と思考の画一化に対置されるのが、「個性的な表現の回路を再び開けようとする試み(an effort to re-open the channels of individual expression)」(qtd. in Rideout 11)としてのモダン・ムーヴメントである。とすれば、「南部での出会い」を特徴づける素朴で平明なオール・ナラティブのスタイル、そして劇的なものを排除して淡々と進む物語構成は、画一化を映し出す「大衆雑誌の技巧的には熟れているが中身の無い物語群」のアンチテーゼであり、「モダン・ムーヴメント」のひとつの実践なのではなかろうか。そしてそれゆえに、ニューオリンズと同じ地平に立つものなのではあるまいか。画一化、量的拡大、蓄積といった原理とは別の、そしてそれらによって圧殺、解体されつつある価値や心性がまだ息づく世界を描き出すためには、それにふさわしい表現様式があることにアンダソンは優れて自覚的であったのだろう。短編小説「南部での出会い」は、主題とフォームの両面において「開いて力を抜いた手」を、つまりは「南部的なるもの」を表現しようとする試みだったと言える。

注

- (1) 実際、南部貴族は、「均質的で中産階級的で資本主義的な様相を強めていく文化において我が道を行く一匹狼(a maverick within an increasingly uniform, middle-class, capitalistic culture)」(Wilson & Ferris 1391)という文化的相貌を持つ存在でもある。そして後述することになるが、デヴィッドもサリーおばさんもこのような面影を備えている。

Works Cited

- Anderson, Sherwood. "A Meeting South." *Death in the Woods and Other Stories*. New York: Liveright, 1933. 221-240. Rpt. in vol. 11 of *The Complete Works of Sherwood Anderson*. Ed. Kichinosuke Ohashi. 21 vols. Kyoto: Rinsen, 1988.
- Bryan, Violet Harrington. *The Myth of New Orleans in Literature: Dialogues of Race and Gender*. Knoxville: U of Tennessee P, 1993.
- Howe, Irving. *Sherwood Anderson: A Biographical and Critical Study*. Stanford: Stanford UP, 1966.
- Novak, Michael. *Unmeltable Ethnics: Politics & Culture in American Life*. 2nd ed. New Brunswick, NJ: Transaction, 1997.
- Rideout, Walter B. "The Most Civilized Spot in America: Sherwood Anderson in New Orleans." *Literary New Orleans in the Modern World*. Ed. Richard S. Kennedy. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1998. 1-22.
- Wilson, Charles Reagan & William Ferris, eds. *Encyclopedia of Southern Culture*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1989.
- 松本 滋. 『父性の宗教 母性の宗教』. 東京大学出版会. 1987.